「ＣＡＴＹ」の名前は、「ＣＡｍｐｕｓ」と「ｃｉＴＹ」からの造語で、地域と大学の相互理解、交流促進を目的として生まれました。
「地域との共生　社会に学ぶ」を合いことばに、高等教育機関としての教育研究の成果を、地域に発信します。また学生が取材活動を通じて、読む・書く・話すといった能力を開発していくことも意図しています。

News CATY

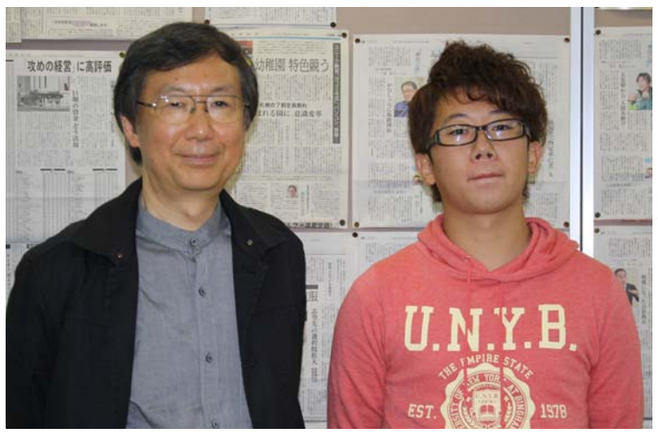
ニュース　キャティ

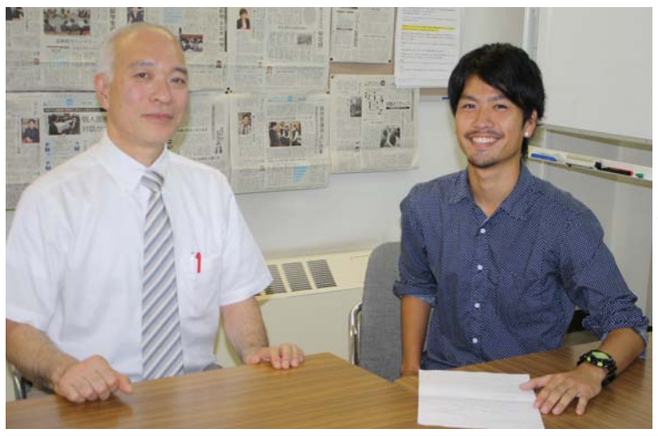
２０１３年９月　第66号

発行／國學院大學
北海道短期大学部
滝川市文京町３－１－１
TEL0125-23-4111　FAX0125-23-5590
編集事務局長　平野富康

向学心さらに膨らむ

短大部で集中講義
國學院大學教授陣が授業「宗教学」と「異文化」





アニメ素材に分かりやすく

國學院大學北海道短期大学部では、９月10日から23日まで集中講義が開講された。私が今回受けた講義は、神道やキリスト教などそれぞれの特殊性、祭りや儀礼の意義、シャーマニズムなどといった、これまで学んだことのない「宗教学」についての講義。講師は、宗教学・宗教社会学が専門の石井研士先生（國學院大學神道文化学部教授）であった＝写真上＝。

石井先生の授業は、教科書だけでは理解が難しいところを実写の映像で見せて解説してくれたり、時には宗教に関係のあるアニメを例として示されたり、とても面白くわかりやすい授業であった。

先生はアニメを研究の素材としてたくさんご覧になっているが、深夜アニメのような一部の人に好まれるものよりも、一般に人気のあるアニメ、例えばプリキュアや、まどかマギカ、ワンピースなどをチェックしているそうだ（昔はセーラームーンなど）。先生によると、女の子が見るアニメの方が、男の子が見るものよりも、宗教性が強く感じられるという。この授業を受ける前は、「宗教は昔のもの」と思っていたが、現代日本の身近な文化のなかにも宗教を発見できるのだ、とそれまで思いもよらなかった新たな文化の見方を学ぶことができた。

また先生の講義のなかで、私が特に興味を引かれたのは、天国と地獄の観念、生と死が無限に繰り返される六道輪廻の思想、生死過程の儀礼の円環構造など、日本人の死後の世界の考え方だった。今回の講義を受け、神道の事だけでなく、他の宗教や、現代と宗教の関係などについても、今後さらに勉強していきたいと思うようになった。（国文学科２年／安田英）

コミュニケーション題材に

９月10日から13日の間、夏休み期間中の集中講義である「異文化コミュニケーション」が開講された。

集中講義とは１限目から４限目まで、４日間集中的に講義を行うというもので、主に東京の國學院大學からいらっしゃった先生の講義や資格取得のための講義が開講される。この講義の先生は、自国と他国が持つ文化の間に起こるコミュニケーションのズレ、つまり異文化間のコミュニケーションというものを中心として研究している、國學院大學・文学部外国語文化学科教授の野呂健先生だ＝写真下＝。

野呂先生は今回滝川で集中講義をされるのが７、８回目、「旅行するタイプではないので、集中講義は楽しい遠出だととらえている」と、のどかな滝川へ集中講義に来ることをいつも楽しみにしてくれているそうだ。

この講義は１、２年生を対象に、文化と言葉、人間の関わりの基本的概念を学ぶ。また、「十分に手が届いて理解できるように消化して学び、ベースを理解して応用するような授業をしている。また、学生一人ひとりが自分なりのものをつくれるような講義の進め方をしている」と野呂先生。ジェスチャーのひとつ取っても文化によって意味が違ってきてしまい、良かれと思ってしたことが裏目に出てしまうような「コミュニケーションのズレ」というものにどう対応していくのかなどが学べ、先生の授業はためになるだけでなくとても分かりすくおもしろかった。

「今年の学生は２、３年前と比べても真面目だが、講義中に自分の考えを表に出せていないけれど、指名して考えを聞き出すと良いことが返ってくるので、宝の持ち腐れになっている。一歩を踏み出す積極性がほしい！働きかけは学生からだ！」と野呂先生。編入するにあたって、國學院大學で苦労しないための学力はもちろん、授業中や授業後にわからないところを質問する前向きな積極的姿勢が求められていると感じることができた。

最後に、野呂先生が研究分野に興味を持ったきっかけが、「唯一できることだったから」ということだった。「唯一できることを無理せず努力すれば結果はついてくる。無理をしないことが肝心」と野呂先生。とても深い言葉に私は聞き入ってしまった。学生それぞれが継続的な努力をする素晴らしい後期授業になればと心から期待している。（総合教養学科２年／多部田和哉）

授業はキャッチボール
教育実習を終えて　指導の難しさを実感

この3週間、私にとって本当に実りある小学校での教育実習でした。子どもたちは元気で人懐っこくてかわいくてしかたがありませんでした。たくさん話してたくさん遊んで、そういう時間を共に過ごすことで、子どもたちとの距離が縮まったのだと思います。

２週目に入り、実際に授業を行っていくと休み時間とはまた違う一面を見ることができました。そんな子どもたちの新たな発見が毎日の楽しみでもありました。

実際に自分が授業を進めていくうちに感じたことは、授業は子どもと言葉と心のキャッチボールなのだということです。いかに子どもから意見や考えを引き出しながら授業を進めていくかが、教師の力の見せどころなのだと思います。

ただ、分かっていても実行することは難しかったです。思っていたような答えが出てこない場合のことも考えて質問の仕方や説明を変えるなど、緻密な指導案をつくることの大切さを学びました。そして、その緻密な指導案をつくるためには深い教材研究が必要でした。一時間の授業の指導計画をつくるのに何時間もかかります。正直、辛いと感じることもありました。しかし、クラスの子どもたちのことを考えると頑張れました。子どもたちの存在が私の力の源だったと思います。そして、担当教員のご指導のおかげでもあります。つまずいているときには、助言や励ましの言葉をかけてくださり精神的に支えていただきました。現場で働いている先生方の言葉はとても心に響きました。

今回の教育実習を終えて、教師になりたいという気持ちがさらに強くなりました。子どもたちと過ごした3週間を胸に今後も努力していこうと思います。（幼児・児童教育学科児童教育コース２年／藤田渓斗）

介護等体験実習を終えて
障害への理解が重要

7月3、4日の雨竜高等養護学校の実習で、私は多くの新たな発見をしました。実習前はどのような生徒がいるのか、どのような学校なのかを想像することもままならない状態でした。事前の学校見学の時に頂いた資料を読んでみても捉えづらく、実習に行くまで不安で仕方がありませんでした。

そのような中で、私が目標にしたのは「障害のある生徒と接する中で、理解を深め、意義のある実習にする」です。第２班として実習を行いましたが、作業学習がなく、通常授業とマラソン大会、そして水泳授業という日課で、とてもハードなものでした。そのせいもあって生徒と触れ合う時間がとても長かったように感じました。

生徒達はとても良くしゃべる子からシャイな子まで色々な幅がありました。しかし、みんな何かを伝えたいという気持ちが伝わってきました。そのような場合はじっと言葉になってくるのを待つことが大事だと教わり、実践してみるとかなり会話ができるようになり、焦りは禁物だと本当に実感しました。

また、生徒の中には頑張りすぎてしまう子もいて、きちんと目配りをしなければならないということを学びました。決して先生方は「頑張れ」とは言わずに「ベストを尽くせ」とおしゃっていました。それは大きな意味があると理解したので、私も極力言わないようにしました。しかし、口をついて言ってしまいそうになったので、気を張っていなければならないので神経を使いました。

どこに障害があるのか分からないような生徒もいたので、接し方がぎこちなくなってしまった初日でしたが、２日目ともなると障害のあるなしに関わらず、生徒と一緒に生活すると良いと思えるようになり、学ぶべきことはかなり学ぶことができたと感じました。私自身としてはかなり意義のある貴重な体験ができたと思います。（国文学科１年／宇井野裕子）

「ＦＭ－ＣＡＴＹ」聴いて下さい
短大部の魅力を発信

私は國學院大学北海道短期大学部のボランティア組織であるＦＭ－ＣＡＴＹに所属しています。名前のＣＡＴＹとは、ＣＡｍｐｕｓ（キャンパス）とｃｉＴＹ（シティ）の造語で「キャティ」と読み、地域と大学の相互理解、交流促進を目的として生まれました。

活動内容としては、地域のミニ放送局であるＦＭ－Ｇ・ｓｋｙで毎週金曜日午後７時から30分間生放送を、また毎週月曜日の午後２時30分には再放送もしております。

番組の構成は短大生が主体となり、企画・取材・打ち合わせ・放送を全て行います。

番組の内容はＣＡＴＹが短大部提供の番組なので、短大部で受講できる「健康科学」「民俗学」などの様々な授業の内容や、学食のランチ紹介などをコーナーとして放送しています。

ほかにも、ありす祭での校内生放送、お正月の新春12時間生放送、そして短大部でのイベント時のお手伝いなどの活動を行っています。

このようにＣＡＴＹでは、リスナーさんを楽しませられるように短大生が努力をしているので是非放送を聞いてみて下さい。（国文学科２年／鈴木祐樹）

「出張講座」活用して

本学では、会場と聴衆をご用意くだされればどこへでも駆けつける、「出張講座」というサービスを行なっています。短大部に集積されている専門的知識・技術を地域に還元することで、草の根から本学と地域との一体感を深めてゆこうという企画です。交通費・講師料は本学が負担します。講座内容は本学コミュニティカレッジセンターにご相談ください。

今回は幼児・児童教育学科の田中一徳准教授による健康・運動の講座を紹介します。６月28日には滝川市福寿大学講座「介護予防のための健康教室―筋力アップを目指して―」と題して二回の講座が開かれ、また翌日には丸加高原伝習館で「フルディックウォーキング体験会」が開講されました。近年の健康志向の高まりを受けてか、それぞれ募集人数を大幅に上回る参加者を集める盛況となっています。

田中准教授の講座は市外でも好評を博しており、最近では９月26日に、美唄市民カレッジ講座の一つとして「強く美しく、体幹筋力アップ入門」が開催されています。

高等教育機関が提供する講座は敷居が高くて…と、どうしても市民の方々はお感じになられるでしょうが、本短大部で普段から多彩な専門分野を教授している教員の中には、このようにどんな身近な関心にもお応えできる講師が必ずおります。講師派遣の需要がありましたら、ぜひ気軽にご連絡ください。（コミュニティカレッジセンター長・月岡道晴／撮影者・田中一徳）

子育てサロン「ありす」

子育て中のお父さん、お母さん、お子さんのための広場です。お子さんを連れて、気軽に遊びに来て下さい。

対象者　おおむね０～４歳未満の子どもとその家族
参加料　１家庭あたり100円（保険料を含む）
申し込み　開催日の前日15:00まで（先着30人）
次回開催日　10月18日(金)
テーマ：体育館で体を動かそう

自然豊かな美唄にぜひ
私のふるさと自慢

私のふるさとである北海道美唄（びばい）市は、ハスカップの生産量において日本一を誇る。ほかにもラムサール条約に登録された宮島沼もあり、マガンや白鳥が飛来するなど、多くの生き物に溢れる。このように、美唄市は農業の盛んな自然の豊かな地である。

近年、美唄焼き鳥などがメディアに取り上げられ、俄かに名を高めつつある美唄市には、「アルテピアッツァ美唄」という場所がある。彫刻家・安田侃の作品が敷地内に約40点常設展示され、コンサートなども行われる芸術空間となっている。旧小学校を改築しており、周りを囲う鮮やかな自然がその空間を引き立てている。ぜひ多くの方に訪れていただきたい場所だ。

四季折々の色彩で見る者の目を楽しませてくれる「東明公園」も、立派な観光地の一つだ。特に、春に咲き誇る桜と秋を彩る紅葉は見事なものだ。

春に東明公園で花見をし、夏にはアルテピアッツァ美唄で涼み、秋は再び東明公園で紅葉狩りをし、冬には市営のスキー場で思う存分体を動かす。このように美唄市は、１年を通して楽しみに溢れる地である。

もちろん、名物・美唄焼き鳥や伝統料理の中村のとりめし、美唄産グリーンアスパラを用いて飼育されたアスパラひつじなど、食の面からみても十分に楽しめるので、ぜひ多くの人に訪れていただきたい。（国文学科２年／新鞍志帆）

入試説明や体験授業
10月5日オープンキャンパス

10月5日に第4回オープンキャンパスを実施いたします。

入試説明・学科企画（体験授業）・個人面談・校舎見学・学食体験など盛りだくさんのプログラムを用意して、お待ちしております。教員や在学生との交流も予定していますので、本学の雰囲気をじっくりと味わってください。

また、同時に保護者のための相談会も実施いたします。学費や奨学金等の相談もお受けいたしますので、お子様と一緒にご参加ください。

各学科の学科企画に関しては、次の通りとなります。

▽国文学科　准教授／森悟朗「日本史のなかの神サマ」
▽総合教養学科　准教授／舛井雄一「意志決定ゲーム～あなたが社長なら誰を選ぶ？～」
▽幼児・児童教育学科
◎幼児保育コース
①造形ワークショップ「幼保ＯＧが教えます！パックン魚釣り」
②押し花ワークショップ「草薙ゼミで、押し花しおりを作ろう」
③身体表現ワークショップ「松田先生、寺岡先生の楽しい音楽遊び・体操遊び」
◎福祉介護コース　助教／藤本愉「長谷川式認知症スケールからみた認知症の症状」
◎児童教育コース　教授／菅惠一「自然と人間の共生について」

参加する際は、事前に申込が必要となります。詳しくは本学ホームページでご確認いただくか、電話（０１２５・２３・４１１１入試広報室入学係）でお問合せください。今年度最後のオープンキャンパスです。是非ご参加ください。